

概念・方法・文化

# コンヴァーシヨンの社会科学的 研究・再考

川上恒雄

KAWAKAMI Tsuneo

はじめに

この5年ほどのあいだに題名や副題に「回心」という言葉を用いた学術書が（広義の）社会科学分野においていくつか出版された（三井 2002; 杉山 2004; 徳田 2005; 芳賀・菊池 2006）<sup>1</sup>。それ以前においては、社会科学の分野において「回心」という言葉を題名に含めた学術書はキリスト教研究以外にはほぼ皆無であった。もちろん、論文や書籍の一部で「回心」を扱った研究は数多くあった。しかし、書籍の中心的テーマとなるほど大きく扱われたわけではなかった。日本でいままぜ「回心」なのか筆者にはその理由がよくわからないが、「洗脳」「マインド・コントロール」といった一般に流布している観念を相対化・客観化するにも、こうした「回心」についての研究をよく理解することが重要だろう。

欧米における「回心」の社会科学的研究はすでにかかなりの蓄積がある。日本人による研究もこうした欧米の研究成果に多くを依拠している。しかし、「回心」に限らず宗教についてのどんな研究であってもそうだが、いくら海外で影響力のある理論でも日本の宗教を考察する際に意味のある理論なのかその判断はなかなか難しい。海外の理論で研究対象のある側面を説明できたとしても、何かもっと重要な側面を見落としているかもしれないし、あるいはその理論の影響力という「暴力」によってそうした側面を隠ぺいすることもあるだろう。

そもそもこの「回心」という言葉自体にさえその訳語としての由来から<sup>2</sup>、キリスト教的バイアスだけでなく仏教（とくに浄土真宗）の「廻心」のインプリケーションがある。そのため、「回心」とは本質的に受動的かつ全人的な変化だといわれることもある（徳田 2005）。しかし、芳賀・菊池（2006）

などの日本の新宗教の調査研究をみると、そうしたキリスト教的回心や真宗的廻心とはやや異なる意味で「回心」という語を用いているようにもみえる。あるいは異なる意味にしないと現実を説明できないのかもしれない。となると、「回心」の意味は研究者の数だけあるとさえ指摘されかねない。

欧米（とくに英語圏）の社会科学的研究でも「回心」の原語であるコンヴァーシオン（[religious] conversion）の意味は一義的ではない<sup>3</sup>。パウロの回心のような劇的な体験を意味することもあれば、たんなる所属宗派の変更を表すこともある。日本語では後者の意味で「回心」とはいわないだろう。この語が実際に何を表すのかは文脈や方法、対象によって異なる。コンヴァーシオンという語自体が社会的性質を帯びているということだ。20世紀アメリカの例でいうと、キリスト教伝統内における青年の内的体験あるいは人格の（肯定的な意味での）根本的変化を一般的には意味していたが、1960年代以降はオルターナティブな宗教の流入とともに増大する非伝統的キリスト教への改宗を指す意味にもよく用いられるようになった。

本稿では欧米（とくにアメリカ）の社会科学的研究における近年のコンヴァーシオンの概念と研究方法を検討し、それらが日本の現代宗教を考察するに当たって何かしらの有用性をもっているのかを考える。というのも、先にあげた日本人による「回心」の研究書は、欧米の理論の検討になるとよくまとめてあるが、国内の教団信者などの実証分析になるとそれぞれ特定の理論的立場に偏りがちであり、まだほかに色々な角度から考察する余地が残っているように思われるからである。まずは欧米の研究動向からみてみよう。

## 欧米の動向

欧米におけるコンヴァーシオンの社会科学的研究の流れについてはすでに、三井（2002）、杉山（2004）、そして最も詳しい徳田（2005）などの日本語の文献で理解することができる<sup>4</sup>。ただし、これらの文献は概ね、何をもって代表的な研究・方法とするかの判断をある程度、英語のサーベイ論文や教科書に依拠していると思われる<sup>5</sup>。筆者は別の方法で研究動向を探ってみたい。それは論文の被引用回数で影響力を間接的に判断する方法である（データベースはトムソンサイエンティフィックの「ISI Web of Science」を利用<sup>6</sup>）。次ページからの四つの表がその結果である。

この方法は主観的判断や好みをかなりの程度、排除できるという利点がある。その一方で、数多くの欠点もある。列举してみると、

1. 包括的ではない。書籍のみならず、影響力が相対的に低いとされるジャーナルを対象としていない。
2. 学問分野や方法によって引用の頻度が異なる。つまり、自然科学に近い方法を採用する論文ほど被引用回数が高くなる傾向にあり、人文学に近いほど書籍を重視する。
3. 評判の確立した論文はいずれ書籍の1章として再刊行されるか、内容を発展させて書籍化されることがよくある。この場合、データに反映されない。
4. 主観による選別を完全には排除できない。コンヴァーシオン研究の範囲の確定を筆者自身がせざるを得ない。

しかし、このような欠点はあるものの、大まかな研究動向を把握するにはそれほど差し支えないデータであろう。最も問題なのは、4番目にあげた範囲についてであ

る。キリスト教神学とは一見無縁である現代の社会科学的研究でも、欧米ではコンヴァージョンをかなり根本的な世界観の変化に限定しようとする研究が少なからずある (e.g. Heirich 1977; Snow and Machalek 1983, 1984)。しかし、日本でこのような意味に限定すると特殊な例にしか適用できない可能性がある。したがって、コンヴァージョンとよく並んで用いられる コミットメント commitment (傾倒) を対象とした論文もデータに含めた<sup>7</sup>。また、1980年代以降、宗教社会学の分野でも台頭した合理的選択理論を適用した論文も、例外を除き、コンヴァージョンという言葉をほとんど用いていない。コミットメントか、とくにアメリカにおけるデノミネーション間の移動の場合はスイッチング (switching) やモビリティ (mobility) という語を使用している。しかし理論の上では形式上<sup>8</sup>、個人の選好 (preference) を組み込んでいるのと、理論自体の無視できない影響力の大きさから、合理的選択理論も対象とした。それから、コンヴァージョンの他動詞コンヴァート (convert) も考慮して、リクルートメント

(recruitment)、洗脳、マインド・コントロール (mind control) などをテーマにした論文も調べた。ただし、先の 2 番目の問題にかかわることだが、精神医学系雑誌の論文の被引用回数はけた違いに大きく、データには含めなかった<sup>9</sup>。一方、社会科学系であれ、いくら被引用数が多くとも引用しているのがコンヴァージョンとはテーマが無関係の論文の場合、対象からはずしている。ただし、一義的な基準でクリアに線引きするのは難しく、周辺的な論文も「参考」としてあげておいた。

まず、表 1 から一見してわかるのは Lofland and Stark (1965) がまぎれもなくコンヴァージョン研究の代表的な論文であるということだ<sup>10</sup>。その検証的な論文である Snow and Phillips (1980) の被引用回数が多いことも Lofland and Stark (1965) の影響力の大きさを示している。さらに興味深いことに、10 の論文のうち 6 は 1970 年代後半から 80 年代前半にかけて発表されている。ここではスペースの都合上掲載しなかったが、上位 50 の論文をみると実際、時代別には 1980 年代前半の論文が多い (50 年代 2、60 年代

表 1. 被引用回数の多い論文 (1955 年以降)

- |   |   |
|---|---|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1. [202S] Lofland, John and Rodney Stark (1965) Becoming a World-Saver: A Theory of Conversion to a Deviant Perspective. <i>American Sociological Review</i>. 30: 862-75.</li> <li>2. [114S] Stark, Rodney and William Sims Bainbridge (1980) Networks of Faith: Interpersonal Bonds and Recruitment to Cults and Sects. <i>American Journal of Sociology</i>. 85: 1376-95.</li> <li>3. [76P] Kirkpatrick, Lee A. and Phillip R. Shaver (1990) Attachment Theory and Religion: Childhood Attachments, Religious Beliefs, and Conversion. <i>Journal for the Scientific Study of Religion</i>. 29: 315-34.</li> <li>4. [74S] Snow, David A. and Richard Machalek</li> </ol> | <ol style="list-style-type: none"> <li>(1984) The Sociology of Conversion. <i>Annual Review of Sociology</i>. 10: 167-90.</li> <li>5. [74P] Galanter, Mark et al. (1979) The "Moonies": A Psychological Study of Conversion and Membership in a Contemporary Religious Sect. <i>American Journal of Psychiatry</i>. 136: 165-70.</li> <li>6. [69S] Glock, Charles Y. (1962) On the Study of Religious Commitment. <i>Religious Education</i>. 57: 90-110.</li> <li>7. [60S] Sherkat, Darren E. and John Wilson (1995) Preferences, Constraints, and Choices in Religious Markets: An Examination of Religious Switching and Apostasy. <i>Social Forces</i>. 73: 993-1026.</li> <li>8. [56S] Heirich, Max (1977) Change of Heart:</li> </ol> |
|---|---|

- A Test of Some Widely Held Theories about Religious Conversion. *American Journal of Sociology*. 83: 653-80.
- [49S] Snow, David A. and Cynthia L. Phillips (1980) The Lofland-Stark Conversion Model: A Critical Reassessment. *Social Problems*. 27: 430-47.
  - [49S] Beckford, James A. (1978) Accounting for Conversion. *British Journal of Sociology*. 29: 249-62.

表 2. [参考] 隣接領域で被引用回数の多い論文 (1955 年以降)

- [649P] Allport, Gordon W. and J. Michael Ross (1967) Personal Religious Orientation and Prejudice. *Journal of Personality and Social Psychology*. 5: 432-43.
- [638P] Festinger, Leon and J. Merrill Carlsmith (1959) Cognitive Consequences of Forced Compliance. *Journal of Abnormal and Social Psychology*. 58: 203-10.
- [255S] Snow, David A. et al. (1980) Social Networks and Social Movements: A Microstructural Approach to Differential Recruitment. *American Sociological Review*. 45: 787-801.
- [243P] Donahue, Michael J. (1985) Intrinsic and Extrinsic Religiousness: Review and Meta-analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*. 48: 400-19.
- [121P] Gartner, John et al. (1991) Religious Commitment and Mental Health: A Review of the Empirical Literature. *Journal of Psychology and Theology*. 19: 6-25.

表 3. 過去 10 年に被引用回数の多い論文 (1997 年以降)

- [54S] Sherkat and Wilson (1995)
- [50S] Lofland and Stark (1965)
- [37P] Kirkpatrick, Lee A. (1997) A Longitudinal Study of Changes in Religious Belief and Behavior as a Function of Individual Differences in Adult Attachment Style. *Journal for the Scientific Study of Religion*. 36: 207-17.
- [37S] Stark and Bainbridge (1980)
- [28S] Wilson, John and Darren E. Sherkat (1994) Returning to the Fold. *Journal for the Scientific Study of Religion*. 33: 148-61.
- [27S] Sherkat, Darren E. (1991) Leaving the Faith: Testing Theories of Religious Switching Using Survival Models. *Social Science Re-*

*search*. 20: 171-87.

- [21P] Zinnbauer, Brian J. and Kenneth I. Pargament (1998) Spiritual Conversion: A Study of Religious Change among College Students. *Journal for the Scientific Study of Religion*. 37: 161-80.
- [21S] Ellison, Christopher G. and Darren E. Sherkat (1990) Patterns of Religious Mobility among Black Americans. *Sociological Quarterly*. 31: 551-68.
- [20S] Yang, Fenggang (1998) Chinese Conversion to Evangelical Christianity: The Importance of Social and Cultural Contexts. *Sociology of Religion*. 59: 237-57.
- [19S] Sherkat, Darren E. (2001) Tracking the Restructuring of American Religion: Religious Affiliation and Patterns of Religious Mobility. *Social Forces*. 79: 1459-493.

表 4. [参考] 過去 10 年に隣接領域で被引用回数の多い論文 (1997 年以降)

- [288P] Allport and Ross (1967)
- [182P] Festinger and Carlsmith (1959)
- [112S] Ellison, Christopher G. and Linda K. George (1994) Religious Involvement, Social Ties, and Social Support in a Southeastern Community. *Journal for the Scientific Study of Religion*. 33: 46-61.
- [110S] Snow et al. (1980)
- [103P] Donahue (1985)

[表についての注]

- 2007 年 4 月 5 日現在。
- 数字は当該期間の被引用回数 (すべてのジャーナルをカバーしていないことに注意)。P は心理学系、S は社会学系の論文。
- 表 2 と表 4 の「隣接領域」とは、基礎理論的な論文 (とくに心理学系) に加え、コンヴァージョンあるいはそれに近いテーマを一部扱っているものの、大半がコンヴァージョンとは無関係の論文から引用されている論文 (とくに社会学系)。ただし、筆者が見落としている論文も多数あると思われるので、あくまで「参考」とした。
- 「洗脳」「マインド・コントロール」関係の論文がほとんどないのは、対象からはずしたのではなく、結果的に被引用回数の非常に多い論文がなかったからである。ただし、対象からはずした自然科学系・医学系ジャーナルにはあるのかもしれない。

2、70年代前半2、70年代後半10、80年代前半16、80年代後半5、90年代前半5、90年代後半8)。次いで1970年代後半の論文が多い。研究史的には1970年代後半から80年代前半にかけてピークを迎えたことがわかる。とくに社会学の分野での論文が多く、*Annual Review of Sociology* が1984年版でコンヴァージョンを取り上げたことが象徴的である (Snow and Machalek 1984)。こうした研究の隆盛はおそらく、アメリカにおける規制緩和的な1965年の移民法改正によってとくにアジアの宗教が流入し、カウンター・カルチャーの拡大ともあいまって、オルターナティブな宗教運動が勢力を増したという社会的背景があるのだろう。このような現象と研究成果発表とのタイムラグを考えれば1970年代後半に論文数が急増したこともそれほどおかしくない。またそれだけでなく、この時代は理論的にも進展があり、Stark and Bainbridge (1980) のネットワーク分析や Beckford (1978) の社会構築主義的アプローチが登場している。

一方、1990年代以降はあまり理論的な進展がないように思われる。ただ、この10年間によく引用された論文を調べると(表3)、それ以前とは研究の傾向が変わっていることに気付く。というのも、表1とは7の論文が異なるからだ。Stark and Bainbridge (1980) 以外に1970年代後半から80年代前半にかけてのコンヴァージョン研究隆盛時代の論文が入っていない。もうひとつの大きな変化は、表3の半分が合理的選択理論を推進する Sherkat の単著あるいは共著の論文で占められていることだ。

Sherkat の論文の被引用回数の多さにはいくつかの非学問的な理由がある。第1に、Sherkat は多数の共著論文を発表しているが、こうした論文を自身で引用しているた

め被引用回数とその分、かさ上げされる。第2に、合理的選択理論を用いる研究者は同じ合理的選択理論の論文を相互引用する傾向がある。第3に、経済学によくみられるような形式理論と計量分析との組み合わせは「反証可能」であるため、再検証がしやすく、引用される頻度が高くなると思われる。ただし、これらのことを考慮してもなお、被引用回数が相対的に多いことだけは断言できよう。

また注意すべきこととして、先にも述べたように、合理的選択理論を適用する論文はコンヴァージョンという語の利用を避けている。Sherkat の論文の多くはデノミネーション間の移動に焦点を絞っており、たしかにその移動はコンヴァージョンというより単なるデモグラフィックな理由(結婚や地域間移動など)である可能性もありうる。社会科学に伝統的なコンヴァージョンの研究とは異なるのである。

さらにこの10年の特徴として指摘すべき点は、表には示されていないが、コンヴァージョンの研究に含めてよいのか判断に迷う論文の増大である。表4には5本の論文しか掲載していないが、そのほかにも境界領域の論文がたくさんある。コンヴァージョンそれ自体への社会の関心が薄れてきたのかもしれないが、一方でグローバリゼーションの進展で9番目にある Yang (1998) のようなクロスカルチュラルな視点を扱った論文の増大が目立った<sup>11</sup>。これらの論文は個人のコンヴァージョンの過程に焦点を当てるといふよりむしろ、コンヴァージョンに至らしめる文化的・社会的文脈を重視している。こうした研究は日本を対象とした研究を考えるうえでも示唆に富むと思われる。この点についてはもう一度あとで検討する。

## 概念の社会性・価値負荷性

英語のコンヴァーシオン (conversion) の意味は基本的に「転換」である。つまり「XからYにかわる」あるいは「XをYにかえる」ことを意味する。ここに宗教的 (religious) という形容詞をつけると「回心」「改宗」などと訳される。ただ、「回心なき改宗」もあれば「改宗なき回心」もありうるように、この語は一義的ではない。さらにまた、先にも述べたように、「回心」なる訳語は日本人一般になじみもなく、どういう意味なのかも明確ではない。いったい何が「転換」するというのか。内村鑑三が適当な日本語を見つけたせず「コンボルション」とカタカナのまままで表記していたことはよく知られている。そして、最初にあげた日本の文献においても回心の意味はそれぞれにおいて差異がみられる。

前節で述べたようにコンヴァーシオンの概念も理論も社会的性質を帯びている。アメリカにおける1970年代後半の社会科学的理論の隆盛は1965年移民法改正に起因したであろうオルターナティブな宗教の流入にかなりの程度、関係していると指摘したが、そもそも20世紀初頭における実証的心理学や精神医学の「科学的」コンヴァーシオン研究の興隆は非伝統的キリスト教の拡大とも関連している。そして、正統的キリスト教内部でのコンヴァーシオンは健全なる体験として描かれるが、異端においては生物学的あるいは心理学的異常と解釈され20世紀後半の「洗脳」の概念と結びついていく。邦訳もされたサーガントの『人間改造の生理』の原著(1957年)の副題が「コンヴァーシオンと洗脳の生理学」となっていることからみてもとれる。その後には社会学的研究の古典ともいえるLofland and Stark (1965) が登場する。彼らはアメリカの統一教会(原

論文では匿名)におけるコンヴァーシオンの過程を段階化したモデルとして提示した。この論文の副題もまた「逸脱的観点への転換の一理論」(A theory of conversion to a deviant perspective)、つまり「世界観なりモノの見方なりが常軌を逸するようになることについての理論」となっている。つまり当時は、宗教研究というよりは逸脱研究としてこの論文が執筆されていたことがわかる。

もともと、社会科学的研究において「宗教」は「科学的」考察にうまくのらない面がある。宗教的コンヴァーシオン (religious conversion) はたとえば、政治的コンヴァーシオン (political conversion) でも道徳的コンヴァーシオン (moral conversion) でもない。しかし概念上、社会科学の研究においてこれらを峻別することは難しい。伝統宗教信者の新宗教への転向と国粋主義者の共産主義者への転向とを定義上区別するには「宗教的」「政治的」などの語を明確にする必要があるが、たとえば「宗教的」一つとってみても多様であり一元的概念化は困難だ。Snow and Machalek (1983) はこうした形容詞をつけない一般化したコンヴァーシオンの性質を検討し、それはG. H. Meadの言葉を借りて「ディスコースの世界 (universe of discourse) の変化」とした。つまり諸個人が暗黙裡に共通了解している意味体系の変更である。そして彼らはその変化が言語に表れると主張した。この見方を批判的に検討したStaples and Mauss (1987) は、因果関係がそうではなく逆で、言語表現をすることで自己の変化があるのだとした。コンヴァーシオンという実在が先か、言語が先か、という議論である。こうした議論はしかし、哲学的な興味を誘っても、「宗教的」という形容詞の意味を考えることに寄与するわけ

ではない。

Beckford (1978) はこうした議論に先立って、そもそも「コンヴァージョンとは何か」と定義付けすること自体、社会学的にあまり意味がないことを示唆している。エホバの証人の調査研究から同一信者でさえ異なる時点で異なる回心物語を語るという事実をみだし、教団内部においてコンヴァージョンの定義付けがそのときどきの方針や存立根拠に応じて変わることを示した。何をもってコンヴァージョンたらしめているのかというイデオロギーがあるというのだ。こうしたイデオロギーは諸々の要素から成り立っており、その構築過程や内容を検討するのがコンヴァージョンの社会学的研究だと Beckford (1978) はみているようだ。したがって、同じ言語や物語に注目していても、コンヴァージョンの普遍的性質を強調する Snow and Machalek (1984) とは方法的に異なる。コンヴァージョンとは本質的に、根本的な自己の変化あるいはディスコースの世界の転換と想定し、そのうえで経験的に把握できる特性を示しているからだ。コンヴァージョンという主観的現実と言語表現とのあいだに因果関係が成立していると想定している。Beckford (1978) はその主観性そのものを問うていないのである。

Beckford (1978) のような見方を徹底すると、コンヴァージョンの概念は完全に相対化・社会化される<sup>12</sup>。たとえば、この立場に従うと、コンヴァージョンかマインド・コントロールかなどという論争の是非を問うことは形式上テーマとならず、マインド・コントロール言説が広がる社会において信者らはどのような物語を語るようになるのか、その歴史・空間上の変遷や位置づけが問題となる。もっと広い見地から見て、コンヴァージョンについての物語・行動様式

がどこに由来するのか、個人の生涯や家族の価値観、教団のイデオロギー、宗教伝統、地域文化などから考察をすることができよう。周辺社会科学的な（一部の）社会学や歴史学、宗教学にとってひとつの有効なアプローチだと思われる。概念そのものを設定することで対象に迫るよりも、概念に負荷された文脈を対象として研究することに重きが置かれるというわけだ。次節ではこうした方法について、日本の研究例をみながら、もう少し検討してみよう。

## 方法

コンヴァージョンの研究で伝統的な実証主義者に対する批判は第1に、コンヴァージョン前の当事者の主観的事実が第三者たる研究者にはわからないことである (Snow and Machalek 1983)。第2に、コンヴァージョンが何かしらの内的体験である場合、その体験を第三者は共有できない、という点である (Yamane 2000)。

第1についてはとくにコンヴァージョンに固有の問題ではない。人が第三者に対して自らの過去を語るとき回顧的にならざるを得ず、現在の価値観や世界観からみた過去のある特定の断面に焦点を当てたり時にはそれを誇張したりさえする。極端な見方をとると、過去なる事実は存在し得ない、それは一個人の現在時点の主観の中にだけある。とくにコンヴァージョンというのはその一個人の価値観なり世界観なりを結果的に大きく変える（と本人が主張している）もののため、過去についての語りや記述がそれだけある特定の側面を誇張したものになりやすい<sup>13</sup>。

この問題を回避する方法はまず、当該者の周辺取材を徹底的に行い過去の「事実」の情報を得ることである。これに対し、厳

格な構築主義者は、取材される者も回顧的に語るため「真実」を正確無比に突き止めることはできないと主張するだろう。しかし、年表に記載できるような客観的事実の羅列は可能だろう。いくら過去を現在時点から主観的に再構成しているとはいえ、記録に残っているような客観的事実さえ見過ごすと、的外れの解釈をしてしまう恐れがある。たとえば、神奈川新聞による大山ねずの命神示教会のルポで、娘の心臓の病気を治すためその教団に入った女性信者の話がある（神奈川新聞社 1986: 44-6）。彼女によると、供丸姫（2代目女性後継者）の加持祈祷のおかげで娘の重病が治り医師が驚いたというのだ。神奈川新聞がその医師を訪ねたところ、カルテには治癒したとは記載されておらず、その女性信者に対した登院するよう指示があった。それに、彼女の主張するような奇跡的治癒があれば医師も覚えているはずだが、全く覚えていないという。神奈川新聞がこのことをその女性信者に問いただしたところ、医師が本当に治ったと言ったのだと主張し、その証拠に娘はいまだ元気に生きていと返答した。新宗教にはありふれた奇跡的治癒の話でも、このように医師の記録と相違があることがわかれば、また別の解釈も生まれてこよう。ただ現実には、一個人の過去について周辺取材を通して包括的な情報を得ることは困難だ。

もうひとつの問題回避方法は、コンヴァーシオンが生じると期待される場で観察を続けることである。芳賀・菊池(2006)はコンヴァーシオンを突発的な個人的体験よりもむしろ他者との相互作用から生じる緩やかな過程ととらえ、その本質は自己物語の書き換えにあるとみなしたうえで、そうした書き換えの過程が真如苑の青年弁論大会発

表者の準備過程においてみられるとしている。幾年にもわたる粘り強い観察によって、コンヴァーシオンの「過程」あるいは自己物語の変容をとらえようとした力作である。ただし、著者らも自覚的ではあるのだが、教団の公式行事の準備過程という、公共的あるいはフォーマルとまではいえないものの完全には（著者らのいう「家庭集会」ほど）私的あるいはインフォーマルでもない場で、研究者あるいは先輩信者の存在が当事者の誇張された表現を引き出してしまう可能性はある。

観察できない故人についてはどうするのかというと、徳田(2005)はコンヴァーシオン前後の双方に日記も含めた詳細な記録を残している者の文書を読み込み、コンヴァーシオンの前後にどのような変化があったのかを調べている。当事者自身の長期にわたる記録が必要なため、そうした記録を全集というかたちで残している日本の近代知識人について考察している。ただし、これについても同様に著者自身が認識しているが、この方法だとそもそも全集を出版できるような特定の人物しか対象にできない。

これらの研究は方法上の手続きに厳格に従った結果、やや特異なケースを対象にしているとも言え、実際の多くの研究は当事者の語る過去を事実と想定するか、事実性の検討は棚上げコンヴァーシオン・ナラティブ自体を対象としてきた。このように方法面に若干の問題があっても、研究の目的が諸個人のコンヴァーシオンを把握することよりも諸個人の細かい相違を超えた規範的に作用するコンヴァーシオンのあり方を探ることである場合、大きな問題はないだろう。規範的な作用とは、組織や文化においてコンヴァーシオンを先験的に定義付けている伝統やイデオロギーの力である。

この規範性は超越的なものではなく、異なる時代や文化において多様である。

## 比較の視点

1990年代以降の文献でよく参照される井上・島蘭(1985)は「宗教史的回心研究」(pp. 94-5)という方法を提唱している。彼らによると、回心物語の背後にある宗教伝統の歴史研究が未開拓であるという。たしかに、これまでの研究は入信の動機の解明や教団入会に至る過程、現代社会・文化の影響などを論じるものが多く、そもそもそのコンヴァージョンに関する物語やレトリックを生み出している宗教的あるいはイデオロギー的メタレベルの研究は日本ではほとんどないようだ。井上・島蘭(1985)によると、回心物語には宗教伝統ごとに代表的モデルがありそれが継承されていくという性質がある。回心物語の生成にはある特定の社会的状況や文脈が深くかかわる一方で、歴史を経て受け継がれていく遺伝子のようなものが根底にはあるというのだろう。「宗教史的回心研究」とはそうしたミームのような宗教的イデオロギーを大きな歴史的観点から把握することだと思われる。

これに近いタイプの研究は、コンヴァージョンの研究とは明示的にうたわずとも、新宗教の一般信者を調査した外国人の研究者によっていくらかなされてきた。たったひとつの教団、それも公式の行事というよりは一般信者の日常がうかがえるようなフィールドでの調査に注力し、そこから日本の新宗教一般の特徴に(一般化しすぎではないかときに思えるほどに)話を展開していくボトムアップ式の手法が目につく。たとえば、黒住教研究で有名なHardacre(1986)の第1章(The World View of the New Religions)は新宗教の世界観や自己の観念

が独自の視点で一般化されているが、これは彼女の霊友会(Hardacre 1984)や黒住教の徹底したフィールドワークから導き出されている面が大きいと思われる。解脫会研究のEarhart(1989)も、少数の信者の長いライフヒストリーの解釈が議論の出発点となり、最終章で日本の新宗教の一般モデルを提出している<sup>14</sup>。日本の新宗教に関するエスノグラファーの先駆けとなった崇教真光研究のDavis(1980)は一般理論こそ展開するのは控えているものの、日本の宗教伝統に目を配りつつ一般信者をさまざまな角度から考察し、日本の宗教社会学者などにもよく参照されたCharles Y. Glockの剥奪理論に批判的検討を加えている。こうした外国人による研究はいずれも、日本人にとって自文化であるがゆえに相対化しづらい面に目を向けているという印象を与えてくれる。

一方、かつての日本人の研究では、欧米の理論の適用あるいはその一部改変というアプローチを取るのが主流であった。正統的な社会科学においては共通言語としての「普遍的な」道具を用いて諸現象を分析するというのはまっとうな姿勢である。その一方で、欧米の理論を批判的に検討しそこから新たな理論を生み出すという姿勢は弱かったように思われる。もっとも日本だけでなく、非キリスト教的伝統が支配的な地域において特段の革新的なコンヴァージョンの理論が生み出されてきたわけではない。しかし、欧米の概念や理論を相対化するという比較の視点は、正統的な概念や理論が対象のある側面を意図せずして隠ぺいする作用をもつという政治的見方を引き合いに出すまでもなく、重要であろう。たとえば、Poston(1992)は欧米人のイスラームへのコンヴァージョンの研究から、宗教体験や改宗への決断のようなものがない(と主張す

る) ことを見出し、西洋における宗教心理学や社会学の理論が文化拘束的なことを強調している<sup>15</sup>。

それでは日本の文脈を考えるうえで、どのようなコンヴァーシオン研究の方向性があるのか。ひとつだけ例をあげて本稿を終えたい。経験的に知られていることだが、新宗教などでは異なる教団間でも比較的共通のモチーフがコンヴァーシオンの物語にみだされる。現世利益などはその典型だろう。現世利益の実現はコンヴァーシオンの契機（あるいは結果）のひとつである。「現世利益に興味はない」と教祖自身が述べている教団であっても、往々にして信者の「体験談」では数多くの現世利益が語られる。これは勧誘のためという見方もできる一方で、現世利益の実現は結果にすぎずその手段や実現に至る過程がより重要だからであろう。Reader and Tanabe (1998) がさまざまな具体例を出しながら強調しているように、前近代より現世利益は日本の宗教にあって重要な位置を占めていると思われるが、近代の民衆倫理の研究にみられるがごとく現世利益は心的態度の変容と密接に結びついている。

道徳的コンヴァーシオンと宗教的コンヴァーシオンとはキリスト教的文脈からいえば異なるものだろうが、儒教が宗教かどうか問題となるように道徳から宗教を切り離すことは日本の宗教伝統の文脈では難しい。興味深いことに、筆者が目を通した弘文堂の『社会学事典』（1988年）、『新宗教事典』（1990年）、『現代宗教事典』（2005年）では、入信や回心の定義に「生活態度」の変化を含めている。キリスト教では例えば『新カトリック大事典』（研究社、1996年）の「回心」の項でもたしかに生活態度に言及しているが、回心（内的変化）の表現型（外的変化）

のような位置づけである。しかし、日本の新宗教の文脈では既存研究をみるかぎり、生活態度の変化の重要性は明らかである。これは一見すると、道徳的コンヴァーシオンである。Kisala (1994) は日本の新宗教におけるカルマの可変的性質に注目し、そこに近代的な選択的自由の精神をみている。「カルマを刈る」とは多くの教団にみられる表現だが、その刈り方は概ね呪術・儀礼と道徳的な態度変容との組み合わせ（比重はいろいろだが）によると思われる。この組み合わせの気付きをテーマとするコンヴァーシオンの物語は無数にあるが、この場合、「道徳的」という形容詞が適当なのか、そういいきれない面もあろう。

コンヴァーシオン研究の目的の一部として、日本人一般の宗教性を明らかにするとともに、それを通して西洋的概念（「道徳対宗教」「世俗対宗教」「現世対来世」「呪術的世界観対合理的世界観」などの二項対立）を批判的に検討することがあげられる。現世利益（あるいは現世志向）とは日本のみならず近代世界に広くみられる現象である。それ自体は特別な現象ではない。しかし、それとコンヴァーシオンとがどのような宗教的あるいは文化的文脈で結びついているのか、とりわけ欧米との対比において興味深いテーマである。これはひとつの例に過ぎないが、グローバルな観点からみたととき、何らかの相対化する視点なしには、（批判するしないにかかわらず）欧米の理論の枠組みからはみでたことを例外として切り捨ててしまう危険性がある。最初に欧米の理論の現状をみたととき、この10年は合理的選択理論が支配的であることを示したが、それは厳密にはコンヴァーシオンの理論とはいえず、また分析の対象も多くがアメリカ社会である。一方でかつて影響力のあった理

論の注目度は減ってきた。コンヴァーシ  
ョンの理論自体が混とんとした状況にある。  
その原因のひとつは、グローバリゼーシ  
ョンの進行で、現実のコンヴァーシ  
ョンにおいて宗教や文化が複雑に入り組んできたか  
らだろう。こうした現状を解明する一歩と  
して、まずは地道なコンヴァーシ  
ョンの事例研究において相対化しうる視点をもつこ  
とが重要だろう。

### 参考文献

(注：被引用回数の表で示した文献は省略した。)

- Davis, Winston (1980) *Dojo: Magic and Exorcism in Modern Japan*. Stanford, California: Stanford University Press.
- Earhart, H. Byron (1989) *Gedatsu-kai and Religion in Contemporary Japan: Returning to the Center*. Bloomington: Indiana University Press.
- エアハート, バイロン・宮家準 (編) (1983) 『伝統的宗教の再生——解脱会の思想と行動』名著出版
- 芳賀学・菊池裕生 (2006) 『仏のまなざし、読みかえられる自己——回心のミクロ社会学』ハーベスト社
- Hardacre, Helen (1984) *Lay Buddhism in Contemporary Japan: Reiyūkai Kyōdan*. Princeton, N. J.: Princeton University Press.
- . (1986) *Kurozumikyō and the New Religions of Japan*. Princeton, N. J.: Princeton University Press.
- 井上順孝・島蘭進 (1985) 「回心論再考」上田閑照・柳川啓一 (編) 『宗教学のすすめ』筑摩書房 86-111.
- 伊藤雅之 (2003) 『現代社会とスピリチュアリティ——現代人の宗教意識の社会学的探求』溪水社
- 神奈川新聞社 (編著) (1986) 『神は降りた——奇跡の新宗教 大山ねずの命神示教会』神奈

川新聞社 (副題の「ねずの」は正式には一  
創作文字)

- Kisala, Robert A. (1994) *Contemporary Karma: Interpretations of Karma in Tenrikyō and Risshō Kōseikai*. *Japanese Journal of Religious Studies* 21: 73-91.
- 三井宏隆 (2002) 『カルト・回心・アイデンティ  
ティの心理学——アメリカ版新宗教運動の  
“心” 的世界』ナカニシヤ出版
- Poston, Larry (1992) *Islamic da'wah in the West: Muslim Missionary Activity and the Dynamics of Conversion to Islam*. New York: Oxford University Press.
- Reader, Ian and George J. Tanabe (1998) *Practically Religious: Worldly Benefits and the Common Religion of Japan*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Roberts, Keith A. (2004) *Religion in Sociological Perspective*. 4<sup>th</sup> ed. Belmont, CA: Wadsworth.
- Snow, David A. and Richard Machalek (1983) *The Convert as a Social Type*. In Randall Collins, ed. (1983) *Sociological Theory* 1983. San Francisco: Jossey-Bass. 259-89.
- Staples, Clifford L. and Armand Mauss (1987) *Conversion or Commitment? A Reassessment of the Snow and Machalek Approach to the Study of Conversion*. *Journal for the Scientific Study of Religion* 26: 133-47.
- 杉山幸子 (2004) 『新宗教とアイデンティティ——回心と癒しの宗教社会心理学』新曜社
- 徳田幸雄 (2005) 『宗教学的回心研究——新島襄・清沢満之・内村鑑三・高山樗牛』未来社
- Yamane, David (2000) *Narrative and Religious Experience*. *Sociology of Religion* 61: 171-89.

### 注

1. 広義の社会科学とは、日本では形式的に人文系とみなされることの多い心理学や宗教学の一部も方

法的には社会学や経済学に近いため、社会科学に含めることを意味する。なお、本稿では筆者の専門外であることから、心理学的研究には詳しく触れていない。

2. 「回心」という訳語の由来については、徳田(2005)が詳しい。

3. 国や地域によっては「コンヴァージョン」と「シ」が濁音になるようだが、本稿ではイギリスで一般的な発音を採用する。とくに深い意味はない。

4. これら三つの研究は共通して、心理学系の研究にとくに詳しい。

5. ただし、これとて容易な作業ではないことを記しておく。

6. <http://portal.isiknowledge.com/portal.cgi>

7. コンヴァージョンとコミットメントについては、Staples and Mauss (1987) や Roberts (2004) を参照。

8. 「形式上」としたのは、合理的選択理論の方法は道具主義的であり、その仮説の実体性をとくに問わないからである。

9. ただし、Galanter et al. (1979) のように社会科学系のコンヴァージョン研究に影響のある論文は含めた。

10. Lofland and Stark (1965) について詳しくは、伊藤

(2003) を参照。

11. アメリカにおける中国系移民・学生のキリスト教へのコンヴァージョンについてはさらに、2006年の *Sociology of Religion* 67(2) で特集が組まれている。

12. Beckford (1978) 自体はしかし、キリスト教の枠内で議論をしているので、ここまで極論しているわけではない。

13. 逆の、「脱会」とよく訳される *deconversion* も、もちろんそうである。

14. Earhart はいうまでもなく日本宗教に非常に通じている研究者だが、筆者はこのモデルをまだよく理解できていない。モデル自体が複雑なうえに一教団の調査研究からここまで一般化した結論が導き出せるのか疑問に思われる。なお、解脱会の調査は日本人研究者らとの共同によるもので、その成果は Earhart (1989) とは別にエアハート・宮家(編) (1983) で公表されている。

15. 古典的な宗教心理学や Lofland and Stark (1965) の批判に Poston (1992) がどれほど成功したかは論争の余地があろうが、イスラームを考察する際の批判の視点としては先駆的であった。

かわかみ・つねお  
南山宗教文化研究所研究員